RNN
Religious NGO Network
On Humanitarian Support
Since 1996
世界各地で人道援助に取り組む
宗教NGO、宗教者、信仰者を結ぶ
人道援助宗教NGOネットワーク

RNNニュースレター
そよかぜ
爽やかな風を世界の人々に

発行所
国際貢献トピア岡山構想を推進する会内
人道援助宗教委員会
委員長：西村美智雄
広報担当：永宗幸信
事務局
〒701-1212 岡山市尾上神道山2770
TEL / FAX086-284-1242
URL： http:// www.rnn.jp/
RNN事務局長：黒住宗道

オーストラリア カウラ六〇年 慰霊祭に参列

平成16年(2004)
7月30～8月7日

先の大戦史上、最大の「日本人捕虜暴動事件」と言われるオーストラリアの「カウラ事件」が起きて60年の節年を迎え、8月5日にオーストラリアで合同慰霊祭が執り行われました。

これは、黒住教（黒住宗晴教主）が昭和59年（1984）からカウラで戦没者慰霊祭を執り行っており、そのご縁で、このほど、地元のカウラ市からの要請によって、事件同日に行う最後の慰霊祭として諸宗教による合同祭典をつとめることになったものです。

RNNからは西村美智雄委員長（KPAC金光教平和活動センター専務理事）、永宗幸信副委員長（天台宗本性院副住職）、黒住宗道事務局長（黒住教副教主）、藤原照彦事務局員が参列しました。RNNのほか、日本からは浄土宗の河合孝俊師も参加し、7月30日に日本を出発して、8月5日の慰霊祭などに臨みました。

8月5日の慰霊祭当日は、まず捕虜収容所跡地にて日の出を拝しながら祈りを捧げ、宿舎にて朝食後、戦没者墓地へ移動して、公式行事の慰霊祭に参加。初めにオーストラリア側の墓地で一連の式典があり、次に隣接する日本人墓地で式典が行われました。

式典では元捕虜の3名の方々をはじめ、カウラ市長等や地元学生の代表他、地元関係者、駐豪日本大使等の日本人関係者の献花、お祈りに引き続き、日本から参加した諸宗教団体代表による慰霊祭が順次祭行されました。

RNN担当による一連の祭典はそれを締めくくる形で行われ、初めに今回京都から私たちのグループに同行された浄土宗の河合孝俊師、引き続いて、西村委員長（金光教）、永宗副委員長（天台宗）、黒住事務局長と吉備楽（黒住教）の順でそれぞれの宗派・教団の様式に則って祈りを捧げ、最後に黒住事務局長より英語にて現地関係者に挨拶、深甚なる謝意が伝えられると、出席者から盛んな拍手がありました。

私達以外の日本人では現地駐在の浄土真宗と真言宗、また、カトリック関係者のお祈りもありました。

今回のツアーには山陽放送の記者が同行取材し、帰国後の8月14日午後1時半より、取材結果等をもとに『終戦特番『平和を祈って』―オーストラリア60年目の慰霊』と題する特集番組が放映され、黒住事務局長が2名のゲストの1人として出演しました。

また、今回の訪豪に合わせて7月31日には、RNNフォーラムに参加して頂いたトー・スイーヒン先生をグリフィス大学の多宗教センター（マルチ・フェイス・センター）に、西村委員長、永宗副委員長、黒住事務局長、藤原事務局員で訪問し、午後4時よりセンター長のトー先生のはからいで地元の「宗際多文化フォーラム」(Interfaith Multicultural Forum)のグループとの交流会を開催しました。

（2・3頁に記事）

合同慰霊祭で祝詞を奏上する黒住事務局長

慰霊祭の行われた日本人戦没者の慰霊碑

戦没者の眠るカウラの墓地

黒住事務局長、西村委員長、浄土宗の河合師、永宗副委員長

小与加世（そよかぜ）

11月に広島のある寺院の同行取材でスリランカに行く機会があった。かつて同国が、サンフランシスコ対日講和会議（1951年9月）に於いて、日本に対する賠償請求を放棄したことは有名な話だ▼講和会議には、スリランカ（当時はセイロン）の政府代表として、ジャヤワルデネ氏（後の大統領、当時は大蔵大臣）が出席。会議の席上、お釈迦さまが初期に説いた仏典である法句経の「人はただ、愛によってのみ憎しみを超えられる。人は、憎しみによっては憎しみを超えられない」との言葉を引用して、対日賠償請求を放棄した。さらに、ソ連の分割占領案にも反対し、韓国と北朝鮮のような対立を生まずに現在の一つの日本があるのだという▼このことは、以前から知識としては学んではいたものの、なぜ、そこまでの発言がなされたのかは不思議に思っていた。しかし、その疑問が今回の旅行で解決した▼スリランカで私は、ラージャパクサ首相やウィクラマシンハ前首相をはじめ、国会議長等の政府要人や政治家への表敬訪問に同行する機会があり、そこで驚いたのは、政治家が本当に深く深く仏教に帰依されていることだった。深い信仰心に基づいて政治がなされているからこそ、目先の国益のみにとらわれない、寛容と赦しの精神による賠償請求放棄がなされたのだと納得させられた▼そんなスリランカで過ごした後、日本に帰ってくると「靖国問題」「戦争責任」「政教分離」「経済制裁」云々の話題が飛び交っていた。日本やそれを取り巻く国々の政治が、スリランカのように、お互いがいがみ合うばかりでなく、宗教心に基づいた寛容の精神で営まれないものか、と残念に思われてならない。

そよかぜ編集局員　河合清治（中外日報SGI勤務）

グリフィス大学・マルチフェイスセンターで交流会

宗際多文化フォーラムとRNNメンバーとの交流会

「宗際多文化フォーラム」と宗際活動について意見交換

7月31日、今回のオーストラリア・ツアーの初日、ブリスベーン近郊のネイサンにあるグリフィス大学構内のマルチ・フェイス・センター（多宗教センター、以下＝MFC）を、西村美智雄委員長、永宗幸信副委員長、黒住宗道事務局長、藤原事務局員が訪問、午後4時よりセンター長のスイーヒン・トー先生のはからいで地元の『宗際多文化フォーラム』（Interfaith Multicultural Forum、以下＝IMF）のグループとの交流会が行われました。友好的な雰囲気の中、互いの宗教的背景や活動を紹介しあった後、違いを認め合い、尊重しながら、共通の目標である世界平和を目指して宗際活動を行うことの意義、重要性を確認しあい、意見交換しました。

2002年に設立されたMFC多宗教センター

MFCは、英国文化を基底に持ちながらも近年急速に多民族（多文化・多宗教）社会となったオーストラリアの現実を踏まえ、多様な宗教的、精神的伝統を持つ人々が宗教問対話に参加し、お互いの宗教や文化についての理解、交流を深め、協働できる場となるよう、地元の有志の寄付により2002年5月に設立されました。

センター長のトー先生は2002年のユネスコ平和教育賞受賞者でもあり、平和の文化が地方、国内、国際的な脈絡において宗教間対話を積み重ねていく中で推進されるよう努力しておられます。そして究極的には、宗教的な精神性を基盤として、心の平安、慈悲、積極的な非暴力、正義、人権といった価値が尊重され、同時に、異文化間の相互理解が進み、お互いを尊敬し、認めあいながら持続可能な社会を築こうとする世界の多くの人々や組織と協働することを目指しています。

実際、開設以来、多宗教問対話を促進するための多くのイベント、特に研究者や様々な宗教者を招いての対話集会やシンポジウムを主催し、今後とも、オーストラリアだけでなく国際的にも、同じビジョン、目標、目的を共有する機関、組織、個人と協働する機会を求め、これを歓迎しています。従って、今回の私たちRNNとの交流会もその一環と言えます。

当日は、まずIMFのガース・リード委員長が歓迎の挨拶をし、トー先生や参加者への謝辞を述べ、続いて、トー先生がRNNと私たち4名を紹介、また1月の「おかやまNGOサミット」や同RNN担当分科会（RNNフォーラム）にオーストラリアからマスター・チン・クン師その他と一緒に出席し、有意義な直接対話や意見交換、宗教施設訪問等ができたこと、日本政府が提案してユネスコ主導のもとに「国連持続可能な開発のための教育の10年」が来年から始まること、その動きに呼応して岡山で（仮称）アジア未来教育センター設立の動きがあること、私たちの来訪はカウラでの日本人戦没者60周年慰霊祭出席に先立つものであること、また、今年7月の万国宗教会議バルセロナ大会の開会式において神道を代表して出席した黒住事務局長の開会の祈りをトー先生も参加者の一人として会場で聴いたこと等を述べ、引き続いて、西村委員長、永宗副委員長、黒住事務局長の順でショート・スピーチとなりました。

宗教間の対話・理解の促進で世界平和の実現を

まず、西村委員長が、KPACと金光教の概略を述べ、その教えに基づいて、世界の人々が各自の信仰を実現し、相互に繋がり、共に支えあって平和な社会が築かれるようにとの願いを胸に日々祈り、行動していることを紹介。しかしながら、21世紀に入っても、戦争やテロが繰り返され、悲劇的、破壊的な戦争の歴史から人類は何も学んでいないかのような非常に遺憾な現実がある。武力が奪うものは尊い人命だけでなく、社会、文化の歴史そのものでもある。いかなる主義・信条、文化的、政治経済的違いがあっても、他者を武力で覆滅する権利を人間は持つべきではない。そもそも争いの原因は人の心にあり、また一方で、その心は人間社会・文明を発展させる価値、叡智をもっている。実際、その根底に深く尊い宗教的な意義があり、それを理解せずして真の平和の構築は望むべくもない。その理解の推進のためにも、世界の宗教者が違いを超えて連帯し、すべての人々の平和と安寧のために共に祈り、行動することが求められている。今回の交流会も、宗教間対話の促進と世界平和を実現していく一つの契機となるよう切に願い、当地に導いて下さった神仏に感謝を捧げると結ばれました。

天台宗の比叡山サミット一隅を照らす運動も紹介

続いて、永宗副委員長が、日本への仏教伝来から天台宗成立の過程や開祖最澄の教えに基づく「一隅を照らす運動」や「比叡山サミット」等について説明、RNNに参加しての活動も自分達の果たす役割を祈りをもって果たし、他者、万物と和合していく中で自他共に自己実現し、幸福・安寧を得るという、その教えの実践であると表明しました。

RNNの設立経緯を紹介神道の平和理念も解説

次に、黒住事務局長がRNNについてその設立の経緯から概略的な説明を行い、成立母体であるトピアの会の基本理念に沿って、医療、教育、環境、福祉等の一般市民のボランティア組織、NGO／NPOと接点・連携を保持しながら人道援助活動を展開してきたこと、また、特に9・11以降は世界の平和構築を目指

した宗際活動、正しい宗教の理解のため、啓発活動、ネットワークを通じて得た世界各地の状況を伝える活動等を実践していることを説明。次に、日本固有（土着）の宗教であり、教祖、教義、教典を持たない神道と、その流れを汲む黒住教について、7月の万国宗教会議で発表した原稿「『誠』の教え―神道による平和への道」の要点に沿って概説、最後に同会議の開会式で捧げた祈りの言葉を読み上げました。

宗際活動の必要性を強調 IMFのメンバーが質問や意見

引き続いて、IMFのメンバーからいくつかコメントがありました。ユダヤ系の参加者は、神道に「誠」（sincerity）についての教えがあることを初めて知って驚いたこと。キリスト教系の参加者は、世界には、実際、誠心誠意平和を目指して活動している人たちもいる一方、実に残念ながら、その他多くの人たちは信仰心を持っていながら、他宗教・宗派に属する人たちに憎悪感や対立意識を持っていることも事実で、なかなかその克服・改善が難しいこと。しかし平和共存ができなければ、その社会はもはや健全な社会とは言えないゆえ、私たちは小規模ながらも努力を積み重ねていく必要があること。ヒンドゥー教の代表は日本に旅行した時の経験を述べ、神社に参拝したときはインドのヒンドゥー教の寺院と類似した雰囲気があることに気付き共感を覚えたこと。また、あるお寺では宗派を超えた平和祈念集会に出る機会があり大変感銘したこと等、人間の宗教意識の共通性、和合の可能性を強調。トー先生は、それまでの対話を聴いて、これからは未来を担う若者への宗教教育、平和の文化についての教育の重要性を強調され、MFCやIMF関係者の挑戦の一つとなっていることを指摘されました。

毎月一回の集会が基盤 IMFとRNNとの共通点

その後休憩を挟んで、セッションが開始され、まず、リード氏がIMFについて概説。

その設立はMFCよりも早く、10年以上前に遡り、ユダヤ教関係者の提唱、地元自治体の後援で設立され、以来、RNNと同様、毎月1回（最終木曜夕刻）集まり、今回のような特別のイベントがある場合は日時を柔軟に変更するなどして対応。通常、定例集会では、平和、慈悲、正義、女性の役割等、その時々の出席者の主要関心事をテーマに、各宗教・宗派の視点からどのように捉えているのかを表明しあい、相互理解を深めています。また、集会の場を特定の宗教・宗派の施設に移して、施設の案内を受け、祈りの実践、布教活動、社会活動等についての説明を聴き、その上で対話するという場合もあります。また、各宗教・宗派を代表するメンバー数名が、一般の公的な集会、例えば「世界難民デー（6／20）」の際の集会に出席して祈りを捧げ、IMF全員一致の声明を読み上げる等、ブリスベーン地域の宗教者が問題意識を共有し、一致して平和を希求する活動を展開していることを広報するなどの活動も行っています。また、オーストラリア独立百周年大会でも同様にメンバー数名が出席して各自の宗派による祈りを捧げました。さらには、MFCとの関連では若者を対象とした宗際ワークショップ（150名規模、主にオーストラリア、東南アジア諸国の学生中心、日本人も若干数）も計画・実施しています。

この後、私たちのショート・スピーチについての意見交換に戻り、神道の「誠」の教え等につき、踏み込んだ意見交換があり、予定時間を超えて対話が続き、別れを惜しみながら盛会裏に終了しました。

多宗教センターで、スイーヒン・トー先生を囲むRNNの参加メンバー

立正佼正会岡山教会渉外部長　川本浩司さんの中国紀行 ① ～峨眉山～

深き聖地に静かにたたずむ古稀の伽藍

峨眉山は、四川盆地の西南にそびえ、浙江省の普陀山、安徽省の九華山、山西省の五台山とともに仏教の四大名山のひとつ。峨眉山は高い山々が起伏しつつ折り重なり、その姿が美人の眉のように細く長いところから峨眉山の名がついた。

仏教が中国に伝来して以来、峨眉山には絶えず寺が建てられ、最盛期には200近くにもおよんだという。現在、山中には32の寺の伽藍が、静かにたたずんでいる。山麓にある報国寺から主峰の金頂までの道程は60キロあまり。長く、曲がりくねった山道は、すべて青石を敷きつめた階段になっている。

山々が高く、峰々が連なり、気候の変化も大きいため、山の上下では15度もの温度差があり、この自然環境により3000種あまりの植物が分布し、なかには世界的にも珍しい珙桐、水青樹などもある。

山林を進めば、周囲はすべて緑、山全体も濃淡さまざまな厚い緑の木々に覆われている。

山麓にある報国寺へ。明代に建てられたこの寺は、峨眉山の寺院建築のなかでは最も大きい。

正殿は4階建てで、山の斜面に沿って1階ごとに高くなっており、とても雄大な印象がある。山門をくぐると弥勒殿があり、その後方には金色に輝く釈迦如来像をまつる大雄殿が建つ。どこを見ているのか分からない八方睨みの釈迦像は何だか不気味だ。

また、紫銅華厳塔は高さ6.8メートル、14層になっている銅塔が建つ。塔身には4700あまりの仏像が鋳込まれ、さらに華厳経の全文が刻まれ、なかなか見ごたえのある塔だ。その背後には、金色丈六の七仏像や景徳鎮焼成の背面仏を安置する壮大な七仏殿。礎石の彫刻や、石造欄干の人物透かし彫りなどは精緻ですばらしい。

風変わりな建物のなかで白い象にのる普賢菩薩

山を登ると万年寺にたどりつく。峨眉山では最古の寺のひとつで、広大な規模を誇ったが、興廃を繰りかえして大半が焼失。堂内を歩いていくうちに明代に再建された、いささか風変わりな建築に驚いた。磚殿と呼ばれる四角の無梁煉瓦殿であり、ドーム型の屋根をもつのだ。

東南アジア仏教の寺院建築の影響を受けたものだろうか、と考えながら堂内に足を踏みいれてまた驚いた。白い巨象の上、蓮の花の台に座った普賢菩薩銅像に出迎えられた。高さ約7メートル、重さ62トンの像で、柱が一本もないドームの中にそびえている。

とても珍しい仏像で目を凝らして見ていると、象には牙が6本もあるし、天井の真上には飛天女が舞う。さらに、壁の下には24の小さな龕があり、鉄鋳の仏像が安置され、壁の上にも龕が6列にならび、おびただしい数の仏像がならぶ。北宗時代（980年）のもので、国宝に指定されている。

堂内の池には峨眉山にしか生息しない琴蛙がいて、夏の夜になると琴のような鳴き声が、響きわたり、

心なごませるのだと聞いて、珍しいものがそろう寺だと感心させられた。

峨眉山山頂の金頂でみる荘厳な景色

峨眉山の山頂となる金頂は、海抜3077メートル。頂上近くの駐車場に車を止め、そこからゴンドラに乗り継ぐ。3分ほどゴンドラに乗り、頂上が近づいてきたところで厚い雲を突き破った。真っ青な空が果てしなくひろがり、太陽の陽光が白い雲海に降りそそぐ。陰から陽への一瞬の変化である。「オッー」という声が、いっせいにゴンドラ内に響いた。開演のベルが鳴る暗い劇場で、緞帳があがって煌々たる照明のなか、いきなり宝塚歌劇団のラインダンスや、ムーランルージュのフレンチカンカンをみるような興奮と驚きにつつまれた。

山頂は海抜3077メートルの高さで、崖が垂直にそそりたち、山の下からどんどん霧が噴きあげてくる。山頂の周囲には杉木立がひろがり、その背後の白い雲海にくっきりとシルエットが浮かぶ。霧が徐々に晴れ、原始の自然の美しさを目の当たりにし、心に沈んでいた澱が洗い流された思いだった。

※今号ではRNNメンバー紹介シリーズ「こんにちは」は休載しました。

ユネスコ国際ワークショップ『持続可能な開発のための教育（ESD）＝マルチメディアの活用＝』

マスター・チン・クン師との交流会も開催

平成16年(2004)
8月24～28日

今年1月22日から25日まで開催された「おかやまNGOサミット」（本紙11号に特集記事）に参加したマスター・チン・クン師とその一行が、8月下旬に同師の主宰する教団活動のため岡山入りされ、ちょうど同時期に開催されたユネスコ国際ワークショップの交流会に出席されました。

このワークショップは「ユネスコ国際ワークショップ『持続可能な開発のための教育（ESD）―マルチメディアの活用』」と題され、ユネスコ、ESD・J（「持続可能な開発のための教育」推進会議日本委員会）、「国際貢献トピア岡山構想を推進する会」（通称「トピアの会」）、岡山県国際団体協議会（CCONN）、アジア未来教育センター（仮称）設立準備委員会の主催で、8月24日から28日まで開催されたもので、基本的に「国連持続可能な開発のための教育の10年」という日本政府が2002年のヨハネスブルグ環境サミット（WSSD）に際して提案し、国連総会で実施が決議された2005年から始まるユネスコ主導の環境教育運動の一端を担うものとして開催されました。

トピアの会のメンバーである私たちRNNは、ワークショップ開催期間中の8月26日にプログラムの一環として、ワークショップ参加者も加わっての交流会を実施することになりました。

交流会には西村美智雄委員長、黒住宗道事務局長、立正佼成会の川本浩司氏が参加し、黒住事務局長が挨拶と進行役を、西村委員長がRNNを代表して挨拶し、マスター・チン・クン師一行との再会を祝うと共に、先ごろのオーストラリア・ツアーの際、MFCで交流会を持ったことにも触れ（本紙別掲）、ワークショップの成功を祈念しました。

マスター・チン・クン師も挨拶に立たれ、ESDの重要性を強調すると共に、人類が持続可能な社会を築くためには、家庭教育、学校教育、社会教育、宗教教育の重要性、また、究極的には一人ひとりの心の清浄さ、誠実さ、寛容性等の重要性、それが人間だけでなく、自然界の物質レベルにまで影響があることを説かれ、真摯にワークショップの成功、ESDの進展、参加者の活躍・貢献を祈念されました。

「トピアの会」解散について

その一方、主催団体の一つ、トピアの会は今年5月22日の総会において今年度内の解散が正式に決定されました。

参加NGOや団体が市民活動として定着 一定の成果収め、その役割を果たし終えた

同会は発足して10年、内外の関係団体、NGOとネットワークを組んで国際貢献を推進してきましたが、この間、参加各NGOや団体が一定の成果を収めると共に、広く市民活動として定着してきたことをもって、その役割を果たし終えたことによります。

2004年度はユネスコ国際ワークショップへの協力が要請されたこともあり、年度末の解散となりました。

トピアの会は、2005年度以降、県内150団体が所属する岡山県国際団体協議会（COINN）等に事業を引き継ぐことを検討しています。

☆RNN通信☆

終戦60年 RNN10年コンサート

永宗副委員長から「終戦60年、RNNが発足して10年目を迎える来年、岡山空襲（6/29）の犠牲者慰霊祭の前後に、犠牲者の慰霊・追悼の意味を込めて、岡山カトリック教会の新築なった『聖ディエゴ喜斎記念聖堂』にてRNNのメンバーによる宗際コンサートを行ってはどうか」との提案がありました。

本コンサートを行うとの提案は今年2月の定例会でもされましたが、今回は期日を設定した、より具体的、かつ時宜を得たもの故、RNN出席者一同、その方向で検討・協議を進めることになりました。

「ハイチ洪水被害」救援支援

AMDAの現地入りを受け、9月30日にお願いしました標題の募金は10月末日をもって〆切らせていただき、AMDAに届けさせていただきました。

なお、新潟県中越地震の支援につきましては、RNNとしての救援募金は行わず、各メンバーが個別に実施しました。

義援金、協賛金等送金用郵便振替口座
加入者名＝RNN
01310・9・63933

サンガラトナさんを迎え、RNN日印交流会開催　10月6日

10月6日、RNNのメンバーでインドにて活躍中のサンガラトナ法天マナケ師（天台宗インド禅定林住職）とインド人現地関係者お二人を岡山市内の会場にお招きして交流会を実施しました。

今回の来日では、これまで同師のインドでの活動に協力して下さった団体等に感謝する集いを京都にて開かれ（10月5日）RNNの西村委員長と永宗副委員長が出席、RNNとKPACにもPMSより感謝状が贈られました。

その翌日の開催にもかかわらず京都から駆けつけられ、再会を喜び、現地の関係者との楽しい交流の場となりました。

現在、サンガラトナ師は、2007年の落慶を目指してインド禅定林の大本堂建立事業を進めておられ、RNNとして同師の更なる活躍と現地での支援活動、また禅定林への献納金としてRNNより50000円をサンガラトナ師に寄託することになり、当日、西村委員長がサンガラトナ師に伝達しました。

RNN活動協賛者名

※下記の名称は、協賛者が寺院、教会、団体、個人等の場合でも所属教団、宗派名のみを掲載させて頂きました。

カトリック
黒住教
金光教
最上稲荷教
真言宗
創価学会
天台宗
天理教
プロテスタント
立正佼成会
臨済宗
イスラーム